

[社 会]

社会的事象を多面的に考察し、社会的な思考力を高めるための指導の工夫

—現地調査による教材開発とそれをもとにした第5学年「環境を守るわたしたち」の実践を通して—

富永 浩文*

1 主題設定の意図

社会科教育が最終的に目指すところは、社会形成に参画する資質や能力を基礎にした公民的資質の育成にある。そのために、社会的事象を多面的、多角的に考察できるよう、問題解決的な学習を充実させることが必要である。改訂学習指導要領でもこの点が強調されている。

自らの社会科における学習指導を省みると、導入時、問題意識が高まらぬまま追求に入ったり、追求意欲が持続せず充実感のないまま終末を迎えたり、資料が十分でないため目標とする思考力や判断力を育成できなかったりすることが多かった。その反省から子どもたちの社会的な思考力の育成、ひいては社会的な見方・考え方の育成のため、より一層問題解決的な学習の充実に取り組もうと考えた。松岡は、問題解決の過程で他者対話と自己内対話を繰り返し取り入れることにより社会的思考力の質的向上が図られることを明らかにしている。¹⁾本研究では、一つの単元における大きな問題解決の過程に、小さな問題解決の過程を相互に関連付けながら複数構成し、問題意識の喚起、追求、交流、まとめ等、一連の活動を繰り返すことで、段階的に思考力の育成を図ろうと考えた。導入場面での問題意識、追求意欲の喚起の手立てを工夫するとともに、追求場面での資料提示及び活用方法や多面的な考察のための学習形態、見方や考え方を深めるためのまとめ、表現活動を工夫することにより、より確かな思考力の育成が図られることを実証しようと考えた。

一方、今回新潟県社会科教育研究会による阿賀野川流域地域 (2009)、水俣八代海沿岸地域 (2011)、足尾銅山及び良瀬川流域地域 (2012) への現地研修参加をもとに第5学年の教材開発を試みた。²⁾巡検を通して得られた経験や資料をもとに、子どもたちが社会的事象を多面的に考察し、社会的な思考力を高めることができるよう、問題解決的な学習を取り入れた単元を構想し、実践に移していく。新潟水俣病の問題は、新潟県の人権教育、同和教育推進上、最も重要な課題の一つと位置付けられる。子どもたち自らが追求を通して知識を獲得し、思考・判断しながら人権意識を高め、差別や偏見への毅然とした態度をもち、社会的な実践意欲を高めなければならない。そのためには、新潟水俣病の問題といきなり向き合うのではなく、我が国の産業発展の過程で生じた公害問題についての歴史的な流れを、子どもたちの問題意識をもとに段階的に追求していく中で取り扱う方がより有効であると捉えた。そのことで、より切実感をもって問題と向き合い、学習によって得られた知識や技能を積み重ね、新潟水俣病の問題という社会的事象を多面的に考察し、より確かに社会的な思考力を高めていくことができると考えた。

2 研究の目的

本研究では、現地研修をもとに開発した教材を活用し、児童の実態をもとに構想した第5学年の社会科単元「環境を守るわたしたち」における問題解決的な学習の実践を行う。その中で、社会的な思考力の育成に向け試みた、以下の方策の有効性を検証する。

- (1) 子どもの問題意識の連続性を考慮した問題解決的な学習過程の有効性。
- (2) 社会的事象の多面的な考察を促すための教材及びその活用方法の有効性。

3 研究の内容及び方法

- (1) 子どもたちの意識の把握と実態に応じた単元構成の工夫

子どもたちの環境問題についての興味・関心、レディネスを、学習前にアンケートにより把握し、実態に応じた単元

* 上越市立高田西小学校

構成を試みる。追求意欲を持続しながら繰り返し問題解決を試み、社会的思考力を高めていく単元構成を工夫する。

(2) 子どもたちの問題意識を高め、問題解決的な学習を通して社会的な思考力を高める学習過程の工夫

子どもたちの問題意識を喚起するとともに、問題意識の連続性を考慮した問題解決的な学習過程を工夫する。その際、社会的な思考力を高めるために、問題解決的な学習の繰り返しや学習形態の工夫も試みる。

(3) 社会的事象の多面的考察を促す資料提示及び資料活用方法の工夫

現地研修で得られた経験と情報をもとに教材開発を行い、資料作成、提示、活用方法を工夫する。様々な資料を提示し、多様な視点からの考察を行う活動の工夫も試みる。

以上について、実践する過程で、学習における子どもたちの反応、ワークシートや作文等から、問題意識の高まり、追求意欲の持続、社会的な思考力の変容について検証し、その有効性を実証する。

4 実践の概要

(1) 単元名 第5学年「環境を守るわたしたち 『公害問題に取り組む』」 全15時間

(2) 単元の目標

- ・様々な公害の現状やその原因を理解し、環境汚染から健康や生活環境を守るための様々な人の取組や、企業、行政による働きかけとともに、私たち一人一人の努力や協力が必要なことがわかる。
- ・身の回りの環境に関心を持ち、環境汚染の原因や環境保全のための取組について各種資料を活用しながら、具体的事例をもとに調べたり、考えたりする。

(3) 子どもの意識及びレディネスの実態に基づく学習過程及び単元の構想

自然環境に対する意識や公害問題に対する知識・理解を問う調査を行った。それによると、①我が国の自然、地域の自然は豊かであるという自然環境への肯定意識は強かったが、豊かな自然は様々な原因により危機に瀕していると感じている児童が多かった。②公害問題についてその原因を問うと、工場や自動車などといった主に産業界によるものとする児童が多かった。半面、自らの生活を原因とする排水、ごみの排出、エネルギー消費等の生活型公害についての関心は40%程度と低かった。③4大公害病についての知識を問うと、新潟水俣病については約80%、水俣病に対しても60%以上の子どもが認知していた。しかし、原因や被害について具体的な知識をもっていなかった。④知識や経験に裏付けされた切実感を伴う環境保全意識は低いと言える。

この結果から、単元において次のことをねらいとして掲げた。①豊かだと考えている自然の多くが、公害による爪痕を残していることに気付き、なぜ公害による被害が発生したのかという問題意識を喚起すること。②我が国は、公害により多くの被害者を出したこと。被害者は、単なる健康被害だけでなく、差別等の人権侵害による被害を受けたことに気付かせること。③現在身の回りにある自然が様々な立場の人たちの環境再生の努力、環境保全の取組の上に成り立っていること。環境の保全が自らの生活によって左右されることなどに気付かせること。④環境保全に寄与するために自分ができることを考え、実践への意欲を高めること。

単元の指導計画を作成する際は次の学習過程を重視することにした。①強い問題意識と目的意識（何のために）や方法意識（何を以て）、当事者意識（自分のこととして）をもたせ追求意欲を高める。②追求場面では自力解決と交流及び表現・発信活動を繰り返し、社会的事象を多面的に考察することで、社会的な思考力を高める。③問題解決的な学習を繰り返し行うことのできる単元構成を行うことで、子どもたちの思考力を段階的に高める。（図1）

(4) 子どもたちの実態に基づく単元の計画と各次の主な活動

1次（1時） 学習課題の設定 公害問題について調べよう。

- ・現在の美しい風景と汚染された山や川、海の風景を比較し、そこから公害問題に関心をもつ。
- ・環境を保全するために、人々が公害問題にどのように取り組んできたか課題を設定し、問題意識を高める。

2次（2～5時） 足尾銅山の公害問題への取組について調べる。

- ・足尾銅山の公害問題に関心を持ち、資料をもとに被害の様子について調べ、被害者の苦勞について考える。
- ・足尾銅山の公害問題への取組を資料により調べ、環境再生と環境保全に取り組む人々の努力について考える。

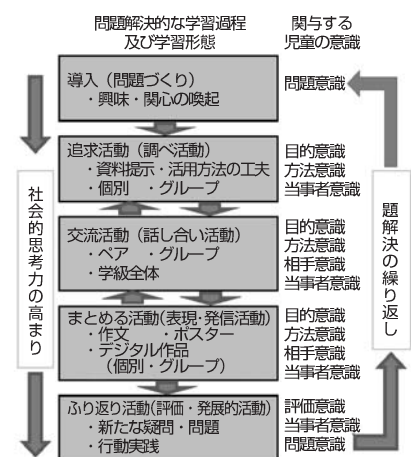


図1 問題解決的な学習過程

3次（6～9時）熊本水俣病の被害と公害問題への取組について調べる。

- ・水俣病の公害問題に関心を持ち、資料をもとに被害の様子について調べる。
- ・水俣病の被害者が受けた苦しみについて調べ、その苦勞を考えるとともに、環境モデル都市への取組を調べる。

4次（10～13時）新潟水俣病の被害と公害問題への取組について調べる。

- ・新潟水俣病の公害問題に関心を持ち、資料をもとに被害の様子について調べる。
- ・新潟水俣病の被害者の苦しみについて調べ、その苦勞を考えるとともに、次の世代への願いを考える。

5次（14～15時）公害のない社会を作るために、「環境を大切に生活」マイ・プランをつくり発表する。

- ・産業型公害から生活型公害に問題が変化していることを調べ、自らの生活改善について考える。
- ・「環境を大切に生活」マイ・プランを立て発表し合い、自分たちができる環境保全活動の意欲を高める。

(5) 問題意識を高め、問題解決的な学習を通して社会的思考力を高める学習過程の工夫

① 単元全体を貫く学習課題の設定（学習計画の作成）における工夫

単元の導入において公害に対するイメージを膨らませるために、現地研修で訪れた地域の自然豊かな今の映像を紹介した。美しい川の流れや青く広がる海、緑あふれる山や溪谷の写真に、子どもたちは口々に「きれい。」という言葉あげた。続いて、それと対照的に排煙で覆われ、荒廃した山、汚泥が溢れ淀んだ川、海の画像を提示した。子どもたちは、写真を見てそのギャップの大きさに驚き、そこから「なぜ」そのようなことが起こったのかという問題意識をもつとともに、日本の産業発展の影に、公害という問題が起こっていたことを知った。その上で、どのような公害が起こったのか、どのような取組により環境を再生させてきたのかという子どもの問題意識を大切にしながら、一緒に学習計画を立てていった。

② 問題解決場面1 足尾銅山の公害問題への取組を調べる上での学習過程、資料活用方法の工夫

足尾銅山の公害の被害を調べる資料

(1) 足尾銅山のあたりの地図

(2) 足尾銅山のあたりを撮影した衛星写真

(3) 銅の生産(精錬)に使われるもの、生まれるもの

(4) 新聞の記事から一部を抜き出しやしました。

(5) 渡良瀬川流域の災害年表（明治時代）

我が国の公害問題の原点とも言われる足尾銅山の鉱毒問題についての学習から追求を始めた。現在の日光市足尾の画像のうち、自然が回復したものを多く提示した。次に、公害で汚れた町や破壊された山地の様子の画像を提示することで、子どもたちに、再び「なぜ」とい問題意識をもたせた。その上で、何が原因か、どのような被害が生じたかを予想させるとともに、資料をもとに追求、検証させた。銅山のある渡良瀬川上流域の足尾では、亜硫酸ガスを含む煙と過剰伐採による山林の破壊。下流域の集落では硫酸を含む汚水と洪水による被害。以上、地理的状況の違いによる人々の苦しみの違いについて

図2 多面的考察を促すために活用した資料

いても考えさせた。子どもたちの認識の発展段階や理解力に考慮しながら、地図や年表をはじめとした図表、新聞の記事などの資料をもとに問題解決を進めた。学習では、教師が選定し、編集、作成した5つの資料（図2）を提示し、活用させた。学習問題に対する子どもたちの予想をもとに、資料のまとめりから問題解決に必要なと思われる資料を吟味、選択させるとともに、選んだ資料それぞれを分析し、比較、関連付けて追求を行わせた。資料の種類は、「足尾銅山及び渡良瀬川流域の地図」、「現在の同じ場所を撮影した衛星写真」、「渡良瀬川の汚染を伝える新聞記事」「銅の生産に利用されるものと、生産によって排出されるもの見取り図」「渡良瀬川流域の災害年表」であった。子どもたちは、排煙、汚水、スラグ（カラミと呼ばれる）などといった公害の原因と被害を予想するとともに、それを確かめるために資料を丹念に読み、そこから必要な資料を選び、関連付けながら、足尾銅山の公害の原因と被害とを結びつけて考えようとしていた。自分で考察した結果は、グループで情報交換をした後、全体場で話し合った。子どもたちは、「工場で

利用される銅鉱石、木材、水といった原料が亜硫酸ガスを含む煙や硫酸銅を含む排水、スラグなどの排出物の発生につながっている。」と考察した。また、「排出されたものによって、森林破壊、土砂崩れ、保水力の低下による洪水、川魚



写真1 資料活用による自力解決 写真2 グループによる情報交換 写真3 全体での話し合い

への影響、水稲への影響等、環境破壊が引き起こされた。」と考察した。さらに、移転を強いられた銅山近くの松木村と渡良瀬川下流域の谷中村の資料を読んで、「環境破壊により生活基盤を失い、

全村移転を強いられる社会的な被害が引き起こされた。」と考察した。このような自らの考察に加え、友達の多様な見方や考え方にふれ考えをさらに深め、以下のような考えをもった。

<p>足尾に住む人たちは、工場のおかげで町が豊かになっているので、工場から出る煙や切り出される木で山のはかいが進んでも、もんくを言うことができなかったのだと思う。工場はもうけることしか頭になかったのか。</p>	<p>洪水の数が大変多いことに気付いた。工場の煙が原因で木がかれ、山が水をためる力をなくしてしまったために起きるのだと思った。後で銅山と関係のない下流の地域で多く起きていることを知りかわいそうだと感じた。</p>	<p>村を出るのは、きつとつらかったと思う。何も悪いことをしていないのに、公害の被害で苦しんで、その上知らない土地に行かされて。松木村の人も、谷中村の人も場所は違ってもつらさは同じだろう。</p>
---	--	--

③ 問題解決場面2 熊本水俣病の被害と公害問題への取組を調べる上での学習過程、資料活用方法の工夫

現在も訴訟や認定問題が継続し、健康被害や差別問題が残る熊本水俣病について学習を進めた。子どもたちにとって比較的認知度が高く、子どもたち自身が調べてみたいという意識が高かった水俣病を、新潟水俣病の前に取り扱った。導入では現在の八代海（不知火海）の美しい風景を紹介した後で、魚が海岸に打ち上げられている光景や汚染された海の風景を提示し、そのギャップから問題意識をもたせた。子どもたちは公害の原因を予想するとともに、被害の様子について資料をもとに調べ始めた。ここでも、現地ですて入れた資料をもとに図や物語資料、写真を活用しながら、被害者の苦しみについて多面的に調べ、考えさせながら学習を進めた。特に、語り部の話を活用しながら、健康被害だけでなく人権侵害に及ぶことについても考えさせた。子どもたちは、公害の加害者が工場だけでなく、一般の人々の中にもいることに気付き、憤りの気持ちを強くしていった。さらに、現在の被害者の取組や水俣市の取組を調べることで、問題を風化させないための努力や環境再生のための努力についても考えさせた。

特に7時「水俣の被害はなぜ広がったのか調べよう」では、前時の終末での疑問をもとに学習問題をつくり、予想を立て、追求を行った。子どもたちの予想では、「工場は排水が原因であることを知っていたが、それを認めずに排水し続けた。」という考えが多かった。それを検証するために、本時では「工場の排水路変更についての地図」と「年表」、「水俣病認定患者の分布図」を主に利用して追求を行わせた。

子どもたちは、工場の立地する場所から排水場所を予想し、まず、地図上に書き込み、全体で話し合いながら教師の提示した地図により検証を行った。そして、認定患者の分布図と比較しながら、被害の広がり調べるとともに、排水の影響と関連付け、考えを深めていった。一方、排水路を変更した後の地図を提示し、「なぜ工場が排水路を変更したのか」を考えさせた。子どもたちは、これについても、年表と被害者分布図とを比較しながら、「工場が発覚を恐れて意図的に変更したのではないかと指摘し、話し合いながら工場の責任について考えを深めるとともに、改めて工場に対する強い憤りをもった。教師が資料の提示と活用方法を工夫することによって、子どもたちが「なぜ」という問題意識を発端にし、驚きをもちながら意欲的な追求を行うことができた。

④ 問題解決場面3 新潟水俣病の被害と公害問題への取組を調べる上での学習過程と資料活用方法の工夫

これまでの学習を受けて、自分たちの住む新潟県でおこった公害問題、新潟水俣病について学習を進めた。ここでは、すでに問題意識が新潟水俣病の原因と被害の追求ということで高まっていた。そのため、公害の原因と被害を予想させ、資料をもとに追求を行った。子どもたちは、阿賀野川流域と被害者発生分布図を表した図から、原因となる発生源が大体鹿瀬地域のあたりであること、被害者が流域に沿って広がり、特に下流域でその数が顕著であることなどを読み取った。また、これまでの学習の積み重ねから、熊本と同じで魚を食べた人が新潟水俣病になっていること、原因を

作った工場が自分たちの責任をなかなか認めなかったことといった共通性にも気が付いた。

また、12, 13時間目では、「生きる皿」、「未来へ語りついで」、そして、新潟水俣病の語り部の話（DVD）を活用して被害の様子について調べ、被害者の苦しみと願いについて考えた。特に語り部の話からは、健康被害だけでなく差別に苦しむ様子に憤りの気持ちを強くした。「なぜ、差別されなければならないのか。」「なぜ、病気であることを隠さなければならないのか。」という疑問が子どもたちから出てきた。A子は、語り部の強い意志にふれ、自らを省み、これからの在り方を考えていた。グループや全体での話し合いを通じて、様々な考えに触れ、事象を見つめなおしながら考えを深めていった。以下、考え方の深まりや社会的思考力の高まりが分かる記録を示す。

[A子 話し合い前の感想]

私は、自分たちの生活のためにとった魚を食べて水俣病の被害にあった人は、手足がしびれたり、目が見えにくくなったりして、大変だったと思います。それだけでも大変なのに、水俣病であるとわかると、「金がほしいんだろ。」とかげ口を言われたり、「うつる」と差別されたりするので、自分が水俣病であることを言えなかったというのを聞いて、かわいそうという気持ちよりも、差別をする人たちへのいかりの気持ちでいっぱいになりました。（中略）会社はしっかりと被害者に保しようしてほしいです。差別もなくなってほしいと思います。

[A子 話し合い後の感想]

（前略）被害者の人たちは、体の痛みと戦いながら、今度は裁判でも戦っていることを知りました。また、同じような被害を二度と出さないために、絶対に忘れないように、語り部として私たちに語り、伝えていきます。私が水俣病の被害者だったとしたら、こんなに強い心で生きていけないと思います。きっと、つらさに心がおれてしまうと思います。（中略）〇〇さんは、「福島原発の問題も、種類は違うけど同じだ」と言いました。福島から来ていた〇〇さんも、7月までいつも笑顔でした。私も、被害者の人たちの心の強さを学びました。

⑤ まとめと発展 公害のない社会を作るために、「環境を大切に生活」マイ・プランをつくり発表する。
学習のまとめとして、公害のない社会を作るために自分ができることについて、振り返り作文にまとめた。

ぼくは、足尾銅山の公害から、熊本の水俣病、新潟水俣病の問題と学習してきました。ぼくは、三つの公害を学習して、みんな同じだなど思ったことがあります。それは、公害で環境がこわされると、苦しい思いをするのは何のつみもない普通の人だということです。また、公害を起こした人や工場が、自分たちのつみをなかなかみとめなかったり、かくしたりすることです。被害にあった人は、苦しみがまんしたり、勇気を出してうたえたりしました。ぼくだったらできるかわかりません。病気になって苦しんでいるのに、「みなまた」とか、「お金がほしいんか。」とか言われて、差別にも苦しんで大変だったと思います。ぼくは、公害問題の学習をして、勉強になったと思いました。この学習をしなかったら、たくさんの人が公害に苦しんで、もともにもどすために努力してきたことを知らなかったと思います。ぼくは、田中正造みたいにはできないけど、公害を出さないため、自分でできることを考えてやっていきたいです。

問題解決的な学習を繰り返してきたことで、多様な立場から問題を捉え、自らの在り方を考えることができた。

その上で、「環境を大切に生活」マイ・プランを作り、発表する活動を行った。まず、これまで学習してきた子どもたちの問題意識が、主として産業型の公害であることに気付かせるとともに、資料をもとに現在の公害の原因の多くが生活型の公害であることに気付かせた。その上で、環境を守っていくための主人公は自分たちであるということを再認識させた。そこから、子どもたちに「環境を守るために、自分は社会に対して何ができるか。」という問題意識をもたせ、足下を見つめ生活改善するためのマイ・プランづくりに取り組むことにした。子どもたちは、クリーン活動やリサイクル、節電・節水を初めとする身近なテーマを考え、自らの生活の現状をもとに具体的な取組を考え実行するようにした。加えて、保護者の励ましのメッセージを掲載することにより取組に切実感をもたせようとした。多様な取組にふれさせることにより、自らができることについて考えを広げ、実践意欲を高めた。

5 考察（成果と課題）

（1）成果1 問題意識の連続性を意識した問題解決的な学習過程、学習形態の工夫による社会的な思考力の高まり

本単元では、子どもたちに問題意識を強くもたせるため、各次の学習の導入において子どもたちの興味・関心を高める資料を活用した。例えば、九州八代海沿岸の地図や八代海の景観写真を提示するとともに、水俣病の発生に関する写真や文書資料を提示し話し合った。子どもたちは、現在の美しい水俣の風景と公害に苦しむ水俣の風景とのギャップに驚き、公害問題の発生や被害について問題意識を強くもつことができた。高まった問題意識を追求意欲につなげ、主体的な追求活動を促すとともに、随所に「なぜ」という問いをちりばめ問題意識をつなげることができた。

また、本単元では、大きく3つの問題解決的な学習を連続させながら、子どもたちの社会的な思考力を徐々に高めていこうと学習過程の工夫を試みた。基本的な展開を①問題意識の喚起と問題づくり②資料をもとにした追求（自力解決、ペア、グループによる情報交換）③話し合いによる集団解決④振り返りと新たな問題意識の喚起とし、これを繰り返しながら学習を進めた。子どもたちは、多様な資料をもとに自分なりの考察を行うとともに、それをもとにペアやグルー

プで情報交換を行い、友達の考えを自らの考えに生かそうとしていた。自分の考えに自信がもてない子どもも、この活動をもとに自信をもって発表したり、友達の考えを参考にして発表したりしていた。個人での追求活動とグループや全体での活動を繰り返すことで、さらに事象を多面的に考察し、思考力を高めることができたと考える。

(2) 成果2 多面的考察を促す資料選定と提示及び活用方法の工夫による社会的な思考力の高まり

本実践では、問題解決を行っていく際、子どもたちが多様な観点から考察していけるように、資料提示の方法を工夫してきた。まず、問題解決に必要な資料を複数提示し、子どもたち自身が予想をもとに選んで活用することができるようにした。子どもたちは、問題ごとに提示された資料に目を通し、必要な資料を選択するとともに、情報を取り出し、関連付けながら解決のため活用しようとしていた。資料を多く提示することによって、最初はその量に抵抗感を示していた子どもも、文章資料に素早く目を通し必要な情報に線を引いたり、地図やグラフの大切な部分に印をつけたりするなど、情報を選び取り出し、吟味する力が付いてきたことが分かった。これにより、子どもたちに多様な気付きを生じさせ、多面的な考察を促すことができた。

一方、本実践では多様な種類の資料を提示した。多く活用したのは地図であった。地理的、地形的な特徴を読み取ることが、公害問題の発生と拡大を考察していく上で重要だったからである。様々な地形図、主題図を年表や関連する新聞記事、写真などと関連付けて読み取らせることで、子どもたちが事象を多面的に考察できるようになった。さらに、本実践では読み物資料、DVD映像の扱いも重視した。水俣芦北公害研究サークルによる学習教材や資料は、子どもたちの発達段階に合っていて大変有効であった。新潟県の副読本や教師用指導資料集、「生きる」シリーズの物語資料も、被害の大きさ、被害者の苦労や努力を深く考える上で有効だった。DVDも直接聞くことができない被害者の話を映像とともに聴取することで、間接的ではあるが鮮烈な印象をもって被害の大きさを理解することができた。このように、社会的事象に対する多面的な考察を促し、子どもたちの社会的な思考力を高めるためには、問題意識、追求意欲に応じ、多様な資料を提示し、比較、関連付け等の活用方法を工夫することが大変有効であったと考える。

(3) 課題 子どもたちの生活に目を向け、自らの在り方を考え、環境保全に向けた実践意欲を高めていくために

今回の学習では、子どもたちが最終的に自らの生活に立ち返り、深まった考えをもとに生活に生かす実践意欲を高めていくことをねらっていた。単元の終末におけるマイ・プラン作りでは、子どもたち一人一人に自然との共生のため自分ができることを考えさせた。子どもたちは、資料をもとに現在の環境問題が、もはやこれまで学習してきた産業型公害ではなく、自らを含む消費者の生活様式から生じた生活型公害によるものであることに気付き、問題意識を高めた。そこから、自分のこととして自らの生活を見直し、環境保全のためできることを考えようとした。また、保護者の協力も得て実践意欲も高めることができた。ただ、本単元は、問題意識や実践意欲を高め、環境保全のための試みを生活の中で実践に移すところまでで終了している。この実践意欲を継続させ、さらに新たな問題意識につなげ、発展させることが必要と考える。より一層切実感を伴い、継続性、発展性のある実践につなげるためにも、公害問題に実際に取り組んでいる人々との直接的なかわりや全員で取り組める体験的活動を随時取り入れるなど、全体での追求と個別での追求を相互補完しながら、自分たちができる環境保全活動を継続実践していくことが課題と考える。

【註】

- 1) 松岡貴徳「思考力を育てる社会科授業の創造―「ふるさと」に着目し「対話」を核に学びをつむぐ子どもを目指して―」 教育実践研究 第15集 (2005) PP37-42
- 2) 環境保全学習、公害問題を取り扱った先行研究としては、大島通夫「地域教材を活用した意欲的な学習活動を創り出す指導の工夫―選択社会科に位置づけた新潟水俣病の授業実践を通して―」教育実践研究 第20集 (2010) PP67-72、小林朋広「人権意識を高めながら、公害から生活環境を守ろうとする子どもを育成する社会科学習指導の工夫―小学校5学年「よみがえれ!水俣」の実践―」前掲 第21集 (2011) PP65-70がある。

【主要参考文献】

- 新潟県福祉保健部生活衛生課編『新潟水俣病の教訓を後世に伝えるために 新潟水俣病教師用指導資料集』 新潟県 平成22年8月 187P
- 新潟水俣病聞き書き集制作委員会 『いっち うんめえ 水らった ―聞き書き・新潟水俣病』 平成15年9月30日 225P
- 水俣芦北公害研究サークル 『水俣病・授業実践のために 学習編・資料編』 平成19年 84P
- 村山智英 『森よ、よみがえれ―足尾銅山の教訓と緑化作戦』 第一プランニングセンター 平成2年4月10日 143P